師と「嘆仏偈」

第８組　是正寺　内黒羽　秀光

今日は「嘆仏偈」についてお話をさせていただきます。「嘆仏偈」は赤本の 92 ページに載っている『無量寿経』の中の短い偈文です。法蔵菩薩が師仏である世自在王如来を詩句をもってほめたたえ、そして自身もいかなる苦難にあおうとも願行をつとめ仏となり、人々を救うと誓われる内容です。別名を「讃仏偈」とも言います。学生の頃は『「讃仏偈」の方が良い』と思っていたのですが、今は『やはり『「嘆仏偈」だ』と思うのです。その理由は、私は学生の時、名古屋の神戸和麿師に同朋大学で教えをいただいていました。先生は体調が悪い中も大学に来て教えを授けてくれました。私が先生の分野外の事を学ぶと先生もそれを調べて助言をくれました。私は神戸先生は東海圏教学の重鎮なので外様の私は歯牙にもかけられないと思っていたので嬉しくほっとしました。好きになりました。先生が札幌別院で御法話をされる時には同行させていただきました。この時、先生の友人の福祉の方も同行されていたのですが、先生は「いいか。自分の土俵で話をせないかん。福祉に触れるのもいい。だが根幹を外すな。」と全てを用いて私に教えてくれました。「お前の根幹は仏教だ、真宗だ」と教えてくれたのです。その後、体調も良くなったり悪くなったりする中、ゼミの食事会にも来てくださりました。その帰りに先生を家まで送る機会を得たので勇気をだして「先生、お寺で一緒にお参りさせてもらえませんか」と聞くと満面の笑顔で「おう。あがれ。」と本堂にあげてくれ、ご本尊の前で先生と「嘆仏偈」をあげました。先生の「嘆仏偈」はとてもゆっくりで驚きましたが、今となってはそれが強烈な思い

出となって私の心に残る事となりました。亡くなられて約９年経ちますが、お勤めするたびに先生の声や教えを思い出します。「嘆」は「讃」より様々な意味や思いが込められている文字です。だから私は「嘆仏偈」が好きなのです。